

富士谷^{ふじ}に^た成章^{なり}が、和歌の歴史に時代設定をした。何を見て時代を決めたか。そのような研究課題がありうるというのが、お話の趣旨です。鯨張って標題を改めるならば、「六運^{りく}」試探^{うん} といったあたりです。ただし、すみませんが、課題・問題の解決については、糸口が見えていません。

- | | |
|------------------|--------------------------|
| —— 1 成章の人と為り | —— 1.1 石碑を訪ねながら |
| | —— 1.2 代表作について |
| —— 2 六運について | —— 2.1 あゆひ抄から |
| | —— 2.2 勅撰集との関係で |
| —— 3 六運に触れた人びと | —— 3.1 上田秋成 |
| | —— 3.2 本居宣長 |
| | —— 3.3 六運略図を蔵した先覚 |
| —— 4 六運の概念の醸成と展開 | —— 4.1 かざし抄、あゆひ抄草稿、六運略図で |
| | —— 4.2 御杖の継承 |
| | —— 4.3 拾遺集について |
| —— 5 あゆひ抄本文のうちで | |
| —— 6 七体七百首をめぐる | —— 6.1 七体七百首の本文 |
| | —— 6.2 七体七百首の言語 |
| | —— 6.3 むきはのうた |

参考文献 1 紙幅の関係で参考文献を2分する。他は原稿末尾に置く。

- 竹岡 正夫 (1946) 富士谷成章の歌論書。岩波書店, 文学 14.1 pp. 9-19。
—— (1955) 稿本あゆひ抄と刊本あゆひ抄の成立。国語学 21 pp. 85-97。
—— (1961) 富士谷成章全集 上巻 語学編・歌学編論注。風間書房。
pp. 5- 278 かざし抄 pp. 1107-1140 換玉帖
pp. 279- 507 稿本あゆひ抄 pp. 1141-1156 起情指揮
pp. 509-1019 あゆひ抄 pp. 1189-1192 六運略図
pp. 1193-1252 北辺七体七百首
—— (1962) 富士谷成章全集 下巻 歌文漢詩雜編・研究篇。風間書房。
—— (1971) 富士谷成章の学説についての研究。風間書房。
—— (1973) かざし抄新注。風間書房。
—— (1978) 稿本あゆひ抄。勉誠社文庫 45。
中田 祝夫 (1977) あゆひ抄。勉誠社文庫 16。
中田 祝夫・竹岡 正夫
(1960) あゆひ抄新注。風間書房。

—— 1 成章の人と為り

成章の人と為りを、中田祝夫・竹岡正夫『あゆみ抄新注』（1960昭和35年）および竹岡正夫『富士谷成章全集 上・下』（1961昭和36年）に多くよりながら、簡略に記します。

—— 1.1 石碑を訪ねながら

成章は、1738元文3年、皆川^{みな}_{がわ}成慶の次男として誕生します。皆川家あるいは成慶について知るところはありませんが、成章の兄・皆川淇園^{きえん}（1735享保19年生、1807文化4年没）も成章も漢学を修めることになり、淇園は、開物学というものを樹てて、18世紀後半を代表する儒者となります。

兄弟が育った地は、京都御所の西、淇園が私塾・弘道^{こうどう}館を構えたであろうところ、現在のブライトン・ホテルの東あたりでしょう。成章は、19歳で、望まれて西隣の富士谷家の7世当主となります。富士谷家は筑後柳川藩の京留守居であり、すなわち、京の柳川藩邸が中立売通西洞院の南西にあつて、そこに住まいしていました。その地は、嵯峨源氏の祖・北辺^{きたの}_{べの}左大臣源信^{まこと}（810弘仁元年生、868貞観10年没）が邸を構えたと伝わり、それによって、後年、成章は北辺を号するようになります。現在、京都府林務事務所になっていて、その北西隅に「富士谷成章宅址」の石碑が建っています。

成章は幼少時から諸事に天才の誉れが高く、富士谷家に入ってから、和文・和歌に傾くことが多くなったようです。富士谷家に入った翌翌年、柳川藩が武事の訓練のために馬場を設けたのに際して、その経緯を800字の和文に認め、文章は成章自筆で石碑に刻まれました。碑は、現在、福岡県みやま市瀬高町本郷の中土居八幡宮の境内に、柳川藩の儒者・安東間庵^{けん}_{あん}の自筆漢文の碑と並んで立っています。成章が文章にいかにか秀で、柳川藩にいかにか迎えられたかということが、端的に知られます。

成章は、和歌を有栖川宮職仁^{より}_{ひと}親王（1735享保19年生、1807文化4年没）および名家・広橋家（成章の存命時の当主は勝胤^{かつ}_{たね}、1715正徳5年生、1781天明元年没）から学びました。有栖川邸は現在の御所の北東部分を占め、広橋家は仙洞御所西向かい南端にある、などと例えば矢守・大塚（1976）の古地図の一枚に確かめると、成章が御所に沿って歩く姿が見えるように思います。堂上派に連なることになります。成章の歌を刻んだ石碑を、島原住吉神社に3基見ることができます。社前の島原西門碑に

島原八景の内 西口菜花

花の色は いひこそ知らね 咲きみちて 山寺遠く 匂ふ春風
島原住吉神社のために、

住吉の 松の常盤に 春はなほ 色香あらそふ 神垣の梅
境内社・幸^{さい}_{わい}天満宮のために、

曇りなく 神の光も やはらぎて ちりづか山に 交る瑞垣
というものです。成章の同時期に与謝蕪村（1716享保元年生、1783天明3年没）がいて、島原俳壇を形成し、その句もあつたでしょうが、「白梅や 墨芳しき 鴻臚館」の句が東鴻臚館址のために採られ、島原らしいところのためには成章の歌が刻まれて、石碑は2001平成13年に島原地区自治協議会および島原伝統保存会が建てるところとなりました。

成章は、1779安永8年に、享年42の短い生涯を閉じます。富士谷家の墓所、千本通鞍馬口の上品蓮台寺、その塔頭の大慈院に葬られました。墓碑は、角柱形墓石の正面に「富士

谷北辺先生之墓」とあり、向かって左の側面から背面・右側面にわたって、570字を超える漢文の銘を刻んでいます。淇園撰、弟・成均書というその文章は、男・御杖^{みづえ}（1768明和5年生、1824文政6年没）建の碑の上で、成章の姿をよくまとめているでしょう。成章の墓碑に向かうと、左に御杖、右に妻・千恵の碑が並び、さらに右に富士谷一族の碑2基があります。富士谷家が成章を特に高く尊んでいることが感じられます。大慈院の門前には、千本通を向いて「富士谷先生碣」の石碑が富士谷家当主によって建てられ、この富士谷先生は御杖を含むように思われます。

— 1.2 代表作について

成章の著作として生前に世に行われたものは、次の2作であると言ってよいでしょう。

かざし抄 3巻 1767明和4年識語

あゆひ抄 おほむね、および本文5巻 1773安永2年識語、1778安永7年板行

識語は、かざし抄で「不尽谷氏口授 門人吉川彦富、山口高端筆受」であり、あゆひ抄で「北辺口授 門人吉川彦富、井上義胤筆受」です。しかし、全文を成章が記したとかねて了解されていて、ここでもそのことは議論しません。成章は、語句を品詞で分けて、副用語「挿頭^{かざし}」・体言「名^な」・用言「装^{よそひ}」・助辞「脚結^{あひひ}」の4類とし、その二つを取り上げたこととなります。あゆひ抄はこれから取り上げますが、言語を概説した巻頭は、この品詞体系なども述べて、山田孝雄^{よしお}の文法論に基盤を与えることになりました。その本体もかざし抄も、歌語辞典の体裁で一語一語を精細に記述し、副詞・助辞の研究史に卓立しています。

筆写原稿、あるいは書名のみというものが多種残り、そのうちに、御杖などが整理し刊行したものが、幾つか挙げられます。

七体七百首^{しちたい しちひやくしゅ} 1797寛政9年御杖跋、刊行、外題は北辺七体七百首

北辺成章家集 富士谷御杖編 1910明治43年正宗敦夫等歌文珍書保存会編集・刊行
七体七百首は、後に取り上げます。家集は、前半が和歌であり、後半が文詞となっています。家集の題で刊行本されたものに、北辺成章家集（1787天明7年淇園序、御杖編、1846弘化3年刊行）がありますが、後に触れるのはこの明治期刊行のものです。

筆写原稿あるいは御杖関係書目で、以下のお話に係するものを挙げます。内容については、後に送ります。

稿本あゆひ抄 成章自筆本

六運略図^{りくうん ならびに} 本居春庭による筆写本など

歌袋^{うた}ぶくろ 1793寛政5年御杖著、同年板行

— 2 六運について

さて、成章の遺産は幾つも挙げられ、そのうちから、本日は、和歌史の時代設定について取り上げることにします。

— 2.1 あゆひ抄から

主著・あゆひ抄のおほむね上に、次の箇所があります。

凡、歌の詞。中むかしは上つよをうしなひ。中ごろは中むかしにたがひゆき。近むかしよりは、ことに心得たがへることのみぞ、おほき。かく、時にしたがひてやうゝよみなりたるけぢめをも。其条々にすこしづゝさだめとけり。いにしへ今のたがひめにはあらで。そのよみ人によりてひがよみしたるばかりのことをば、とりたてゝいはず。此抄、ひとへにもとをあきらめむのころにて。末をおさふるにいとまあらねばなり。

(「。」は原文、「、」および濁点・下線は石井、「ゝゝゝ」はくの字点。

あゆひ抄第1冊(おほむね)4葉裏面)

歌の詞が、「上^{かみ}つ^よ世」の様を「中昔^{なかむかし}」は失い、その中昔の様に「中頃^{なかごろ}」は違ってきて、さらに「近昔^{ちかむかし}」は大きく異なっている。「時」が流れ時代が移るに従って「けぢめ」すなわち違いがある、と言っています。時代としてここでは過去を言うばかりですが、おほむね下では、近い過去「昨^をとつ世」をさらに加えつつ、当代「今^{いま}の世」も挙げて、六運という項目を立て、次のように言います。

六運 開闢より光仁天皇の御世までをおしなべて上つよといふ。其後より花山院御世まで二百五年を中むかしといふ。後白川院御世まで百七十二年を中ごろといふ。四條院御世まで八十四年を近むかしといふ。後花園院御世まで二百二十二年ををとつよといふ。其のちを今の世とす。(同上、13葉裏面)

六運という術語はこのあゆひ抄によって世に知られることになったでしょう。別に、標題に六運略図并辨と謳った一書もあります。略図というのは、天理図書館現蔵一本で見ると、まず時代の名を挙げる。次に、毎面9行・毎行6段になるように罫を引き、罫にしきられた升それぞれを1年として、天皇・年号が改まるごとにその新しい名を升のうちに記入した。ものです。上つ世ではさすがにその罫・升を省略していますが、図を今の世まで示した後、辨というのは、各時代の説明です。

六運略図并辨の全体に対する跋文があり、天理図書館現蔵一本を写します。静嘉堂文庫現蔵本では、末尾に成章の名が添えられています。

右六^きはのうちに、むねとありける人々のこと、えらびいだされけむふみのこと、哥あはせよみかはしなど、またさらでも哥のことにあづかりたることどもをば、べちにかきあつめてくはしくしるさむのころざしあり、今はたゞおほむねをいふなり、この初頭によるならば、「六運」は「むきは」と言うのがよいようです。しかし、国書総目録等でも「りくうん」によっているように見えますので、以下、「りくうん」と言うこととします。末尾の「別に書き集めて委しく記さむの志」は、草稿などとしても遺されていないようです。

—— 2.2 勅撰集との関係で

現代的にと言いますか、私に分かりやすいように、書き換えますと、六運は次のような年表になります。

上つ世			1441年間以上
	<u>781天応元年</u>	光仁天皇退位	
中昔	781天応元年	桓武天皇即位	以降 205年間
	905延喜 5年	古今集	
	955天暦 9年	後撰集	
	<u>986寛和 2年</u>	花山天皇退位	
中頃	986寛和 2年	一条天皇即位	以降 172年間
	1005寛弘 5年	拾遺集	この後、後拾遺集・金葉集
	1151仁平元年	詞花集	
	<u>1158保元 3年</u>	後白河天皇退位	
近昔	1158保元 3年	二条天皇即位	以降 84年間
	1188文治 4年	千載集	この後、新古今集
	1235文暦 2年	新勅撰集	
	<u>1242仁治 3年</u>	四条天皇退位	
昨つ世	1242仁治 3年	後嵯峨天皇即位	以降 222年間
	1251建長 3年	続後撰集	この後、勅撰集10代
	1439永享11年	新続古今集	
	<u>1464寛正 5年</u>	後花園天皇退位	
今の世	1464寛正 5年	後土御門天皇即位	以降 309年間以上

上つ世は、あゆひ抄に「開關より」としているところ、年数に神武天皇以降を記し、今の世の年数は、あゆひ抄の成立識語までを計算しました。

成章は天皇によって時代を区切っていますが、実質は、後に述べるところで明らかのように、勅撰和歌集によります。そこで、勅撰集の成立年次を添えました。次のような意図、と言うよりは観察の総括が、成章にあったかと思われました。

- ・中昔 勅撰和歌集の草創期であった古今・後撰集の50年程度、および
- ・近昔 藤原俊成・定家父子が率いた千載・新古今・新勅撰集の50年程度、この二つを歴史の基盤として、特に「昔」の名を与え、
- ・中頃 その二つの昔の間、および
- ・昨つ世 後の勅撰集終了まで

をそれぞれ設け、さらに、それらの勅撰集の時代の前と後とを設けて、歴史の全体とする。という意図です。

中昔は、勅撰集成立以前を取り込んでいますが、勅撰集編集の舞台となった平安京を意識して上限としているでしょう。中頃・近昔の始まりは、一条天皇・二条天皇の即位を契機としていると見るよりは、花山法皇が拾遺集を親撰したとも言われ、後白河法皇が千載集を下命したというように、法皇が関係しているとするのがよいように思います。しかし、昨つ世の始まりは近昔の終わりであり、近昔の終わりは、新勅撰集が後堀河天皇の下命でありながら、法皇としての存命時にも出来上がらず、四条天皇の在位時に完成した、とい

うことに関係しているでしょう。昨つ世の終わりは、新統古今集を下命したのが後花園天皇であったことに関係しているでしょう。

現在の私たちに行き亘っているであろう和歌の歴史の知識とは、この六運は異なっています。勅撰集で古今集・新古今集が屹立することには、異論はないとしても、私たちには、三代集・八代集・十三代集というまとまりが込み付いていますから、拾遺集が三代集のうちで切り離されること、また八代集側の千載集・新古今和歌集と十三代集側の新勅撰集とが一つに括られることには、違和感があります。藤原定家亡き後に二条派と京極派とが対立したことなどを考えれば、定家が積極的に関わっていた新勅撰集は十三代集から切り離し、対立の時代は一つとしてまとめてもよいかなど、考えさせられるところもあります。和歌の歴史について、時代区分の論がどのように存在しているか、すみませんが、いま承知していません。しかし、六運が時代区分の嚆矢であることは、間違いなく、そこにどのような思想があったのか、見られるならば見たいと望む次第です。

—— 3 六運に触れた人びと

六運を知って、批評を記した人が二人知られています。いずれも、驚嘆したという感想の一言にとどまりますが、紹介します。

—— 3.1 上田秋成

まず、上田秋成（1734享保19年生、1809文化6年没）を挙げます。秋成は、淇園と同年であり、淇園・成章兄弟と親しかったようで、兄弟をからかった文言を随筆・胆大小心録（1808文化5年成）に遺しています。その秋成が、俳諧の切れ字を論じた也哉抄（1774安永3年蕪村序文・刻、1787天明7年門人序文・刊行）で、六運に触れます。あゆひ抄が成った翌年のことで、まだ板行はされず、原稿ないし板下を見たのでしょうか。也哉抄一書の方針を初めに述べた「統論」7箇条で、第1条の後半を次のように記します。

抑言語^{ゲン}は和漢ともに何の教への書も。註^{ギョ}積を待ずして。其世の人はよく聞しりたるを。世かはり時のゆければ。言語もそれに従ひてうつりとうつり。何といひし言^{コトバ}は。昔はしかのみの義なりしを。今はかくもゞ、意得べしと云につきては。てにはの活用^{クハツヨウ}も。時^{ハツラキ}世にすこしづゝのかはりめ有といへども。其はじめに立かへりて後を下し見ば。かくれたる事もあるまじき也。上^{コトバ}古の常なる言^{コトバ}は。中^{コトバ}古にして雅言となり。中^{コトバ}古の俗言は。下^{コトバ}世の雅語となることわりは。紀^{コトバ}氏の。今をむかしに恋ざらめかもといはれたるにおなじものにやこゝろうべき。或人の抄に。てにはに六度までの転運あるよしをいはれたり。誠にしか有べき事也。ことに俳諧は。二^{コトバ}百年^{コトバ}来の下^{コトバ}世に。雅俗打まじへていひはやせる遊びなれば。利^{コトバ}口に過たる活用多く聞人もそれをこゝろして見わかすべき事也けり。

（1葉表面～裏面）

この「抄」てには「六度（転）運」という語句は、あゆひ抄を髣髴させるものです。六運の時代の名は、ここにも也哉抄の本文にも現れてはいませんから、也哉抄があゆひ抄から受け取ったものは、言語が変遷するという大枠の考えかたでしょう。それでも、かいなでのもではなかったであろうと思われる。すなわち、「や」の項のほとんど最後に、

猶くはしくはゞ「と」は「とも」の略語にて。古^{コトバ}書に。与^{ヨメ}共^{キヤウ}将^{セウ}兼^{ケン}の字を。と「とも」など訓^{ヨメ}るに見つべし。それをはやくより哥辞^{ウタ}にも。物を指す辞に

よめり。言^{コト}語は代^{カタ}々に転^マ運^ウする物なれば。さる事なりとは心得べけれど。つひに其本^ホ義^ギをわするゝ事と成にたり。(20葉表面～裏面)

とあって、この「言語」「転運」「本義」に、統論第1条の「言語」「転運」あるいは「しかのみの義」が容易に重ねられることによって、承知することになります。

なお、也哉抄の統論第5条には、末尾近くで次のようにあります。

さて古^コ人の作^サ例^{レイ}には。かたはら雅^ヤ俗^{ソク}をまじへ詞^{コトバ}をそへなすは。ある人の発^{ハツ}明^{メイ}にならふ也。(4葉表面)

かざし抄・あゆひ抄が、引用した古文の傍らに里言^{さとことば}を記し、古文の理解の助けとした、その手法に也哉抄は倣ったと言って、成章への傾倒を公言しています。

—— 3.2 本居宣長

次に本居宣長（1730享保15年生，1801享和元年没）を挙げます。1752宝暦2年・数え23歳で上京し、足かけ5年，烏丸通四条のあたりで医学・儒学を修め、日本研究にも目覚めることになります。宣長は、その後も幾度か上京し、門人に講義をすることもあって、烏丸通を挟む2基の石碑「本居宣長先生修学之地」「鈴屋大人寓講学旧地」で顕彰されることになりました。四条の成章の6歳年長であり、どこかで袖振り合っていたかもしれませんが、知り合ったということはないようです。玉勝間に次のようにあります。

藤谷^{フタバ}成章といひし人の事

ちかきころ京に。藤谷^{フタバ}専右衛門成章といふ人有ける、それがつくれる。かざし抄、あゆひ抄、六運図略などいふふみどもを見て、おどろかれぬ。それよりさきにも。さる人有とは。ほの聞たりしかど。例の今やうの。かいなでの哥よみならんと。みゝもたゝざりしを。此ふみどもを見てぞ。しれる人に。あるやうとひしかば。此ちかきほど。みまかりぬと聞て。又おどろかれぬ。……。万葉よりあなたのことは。いかゞあらむ。しらず。六運の辨にいへるおもむきを見るに。古今集よりこなたさまの哥のやうを。よく見しれることは。大かたちかき世に。ならぶ人あらじとぞおぼゆる。(巻八，21葉表面～22葉表面)

成章の著作に宣長が接したのがいつであるかは、知られません。野口（2015）は六運略図并辨の現存伝本の様相を整理して、宣長の周辺では、宣長の男・春庭^{はる}には1786天明6年に六運略図并辨を写し（本居宣長記念館現蔵）、その春庭筆写のものを宣長門下の石塚龍磨^{たつまる}が1790寛政2年に写した（静嘉堂文庫現蔵）、と見立てています。その筆写の時期は、成章没後7年・11年に当たります。

なお、春庭（1763宝暦13年生，1828文政11年没）は失明し，1795寛政7年から2年間，京都で針医の修業をします。寄宿したところは，富士谷家の西100メートル余りでした。春庭は，後年，活用を扱った詞八衢^{ことばの}やちまた（1806文化3年序・板行）および派生を扱った詞通路^{ことばの}かよひぢ（1828文政11年成，翌年板行）をまとめますが，この語学への情熱は，京都で燃え始めたかもしれません。御杖と春庭とが対座するという幻影を，足立巻一が小説『やちまた』で描いています。

— 3.3 六運略図を蔵した先覚

野口（2015）には、六運略図并辨の現存諸本の錚錚たる旧蔵者も知ることができます。松井簡治（現蔵は静嘉堂文庫）、佐佐木信綱（天理図書館）、中山久四郎（東京都立中央図書館）、金沢庄三郎（駒沢大学図書館）、山田孝雄（富山市立図書館）、……。

所持はしなくとも六運略図并辨に接した人は、さらに多かったでしょう。こうしたうちの幾人かが、和歌ないし歌学の歴史のうちに位置づけています。佐佐木信綱には後に触れ、また関連して福井久蔵などにも触れることとなります。ここでは、歌学書でない書目での立言の一つ挙げます。山田孝雄『国語学史』（1943昭和18年）のもので、既に『国語学史要』（1935昭和10年）にもありますが、文言に対する私の好みで、後で公刊されたほうを選びます。六運略図を引用した部分は、ここでは省略します。

富士谷は又言語を研究するに時代を辨ふべきことを知れり。かれは所謂六運の説を立てたり。……かくて、六運辨といふを著して之を説明せるが、これは元来歌道の変遷を明かにする為のものなるが、富士谷が、国語学上の例証を主として八代集にとれるに、その標準とする所ここにありと考へたるが故なるべし。この六運の説の当れるか否かはとにかく、かく時世の変遷を眼中におきて歌文を観察することを教へたる点も注目すべきことなり。

(pp. 588-589)

— 4 六運の概念の醸成と転化

成章がどのように六運に至ったか、また御杖にどのように受け渡されたかを、顧みます。

— 4.1 かざし抄、あゆひ抄草稿、六運略図で

かざし抄は、柱題「挿頭題」とする凡例を初めに置き、その一箇条のうちに、本文での説明の用語として次を挙げています。

上古 神世より万葉集の時までをひろくさしたり

中古 三代集の時をいふ

中ごろ 三代以降

ちかき世 文治建久以後、兩朝以後其所にあたりて心得べし (挿頭題3葉裏面)

六運に比べて、時代の設定を勅撰集により、時代の数も少なく、境界の位置も異なります。上古から中古への間が分明でなく、また、中古として三代集が一括され、近き世として千載集以降が一時代になっています。近き世の「兩朝以後」は、南北朝時代以降を意味するのであれば、勅撰集では玉葉集（1313正和2年）以降となりますが、政治史の時代を流用したように見えます。なお、南北朝期の天皇は北朝によっています。

あゆひ抄には草稿が遺り、稿本あゆひ抄という竹岡（1955）の命名によって、翻刻・註釈が『富士谷成章全集上』に収められ、影印が竹岡の解説（1978年、勉誠社文庫）で成されています。その草稿ではおほむねが全書の末尾にあり、その一箇条に

かみつよ 中むかし 中頃 近むかし をとつ世 今の世 (勉誠社文庫 p. 174)

と時代名が並び、その名の限りでは既に刊本に同じであるものの、その規定も、「六運」の名も「運」の用語・用字も、未だ見えません。刊本で先行している「凡。歌の詞。……」は、稿本では後に配され（勉誠社文庫 p. 179）、推敲の跡を残しながら、ほぼ同文で出てきています。草稿から刊本までどれほどの段階・時間があったのか分かりませんが、彫琢

が重ねられたのでしょう。

ところで、六運略図の天理図書館現蔵一本では、年次の最終が「今上」「明和」であり、今上は後桜町天皇に対応して、その即位1762宝暦12年・退位1770明和7年です。一書の成立の年次は、したがって、かざし抄が成立した1767明和4年から、後桜町天皇が退位する1770明和7年までの間になります。図を省略すると、残る本文は、あたかも図の標題およびその時代の名・規定となり、天理図書館現蔵一本では次のようです。()内は、それぞれ、次の行の和暦を西暦に換算したものです。

第一かみつよ (～ 781年)

自人皇第一代神武天皇元年到同四十九代光仁天皇天応元年凡一千四百四十一年略之

第二なかむかし (782年～ 986年)

自五十代桓武天皇延暦元年到六十五代花山院寛和二年凡二百五年

第三なかごろ (987年～1158年)

自六十六代一条院永延元年到七十七代後白河院保元三年凡百七十二年

第四かむかし (1159年～1242年)

自七十八代二条院平治元年到八十六代四条院仁治三年凡八十四年

第五おとつよ (1243年～1464年)

自八十七代後嵯峨院寛元々年至百四代後花園院寛正五年凡二百二十二年

第六いまの世 (1465年～)

自百四代後土御門院御宇之始至当時凡三百年餘

和暦が添えられているのがあゆひ抄との違いですが、時代の始まりの年次は天皇即位の翌年に対応していて、略図本体でも、天皇の名を即位翌年の升に入れます。上つ世の説明に末尾「略之」とあり、すべての時代で図を欠く静嘉堂文庫現蔵本などでは理解し難いところでしたが、野口(2015)は、この時代については図を示さなかったと解釈して、適切であると思います。また、略図では上つ世を神武天皇からとして、かざし抄・あゆひ抄が天地開闢からとするのと違ってきます。曩に 2.2 の年表で上つ世の年数を示し、この略図の年数によりましたが、和歌の伝承をスサノオ尊の「八雲立つ 出雲八重 垣妻籠みに 八重垣作る その八重垣を」に始めるならば、神武天皇より前を入れるのがよいでしょう。なお、天皇の代数を、ここに百四代が重なるように誤ることは、世上で珍しくなかったようです。

六運略図并辨の天理図書館現蔵一本では、2.1 に引いた全体の跋文の後に、書写にかかわる奥書が二三あります。その最も古いものは年月を記しています。

安永六とせと聞る初冬写し畢

これによれば、あゆひ抄が1778安永7年に板行されて六運の用語が世に弘まったであろう、その前に、六運略図并辨を知る人がいたことになります。

あゆひ抄で、時代の設定を専ら天皇によるのは、勅撰集が勅命によるということに関係しているように思えます。かざし抄のように直接に勅撰集によるのが理解し易いところですが、二つの集の間にどのようなしきりを立てるかということの問題にしなければならず、集を時代の始点あるいは終点に置くよりは、下命・編集の時期を考慮したということになるでしょう。

六運に夙く接し、記すところがあった人として、御杖は最重要です。3 に挙げるべきでしたが、六運の概念の形成にも関わっていますので、こちらに送りました。

御杖が著作に六運を取り込んだのは、数え26歳時に言わば和歌備要として編んだ歌袋が最初であるようです。全6冊の第1冊のうちに、六運の項を立ててあゆひ抄おほむねの六運を写し、略図を具えず、「六運辨」という標目のもとに時代の説明をしています。例として中昔を写します。その説明の文言は、標目から察せられるとおり、六運略図并辨の辨の部分とほとんど一致します。いま対校は省きます。

第二なかむかし《中むかし十六代、今の世の哥のおやといふべし》

あがりての世はるかなる昔は、何事につけてもてる日ともねがはしく、たかき山ともあふがまほしき中に、此きはぞ今も耳とほからず、よゝの哥よみたちも、この時を本として口をもひらかれければ、かへすゝも目をつくべきは此きはなり、そが中にも、水のを《清和》の御時までをはじめつかたといふべし、此時までは詞の道ふかくもてあそばせ給けんともみえず、つらゆきが花すゝきほにいだすべくもとかきたるも、此あひだの事をや思ひけん、そのゝちより醜翻村上の御時までをみなかとす、上より下までよみ人もおほく、ことがらおのづからうるはしくとゝのほりて、ほのかに今ののりをそなへ、あらはにいにしへのふりたるをあらためられたり、それより末このむ人よむ人いやましにおほくなりゆき、ことのはさらにしげかりけれど、みなかよりいはゞ、すこしつくりたるすがたも見えそめて、おのづからなるころの姿をはらみたれば、このほどを末つかたといふべし、集には古今、後撰、拾遺、菅家万葉、六帖等つねに人のもてなやみぐさなり、又いせものがたり、大和物語などもとむるにことたりぬべし、

古	さくら花 咲にけらしも	あし引の 山のかひより	みゆるしら雲	貫之
後	ほとゝぎす	はつかなるねを	聞そめて	あらぬもそれと
拾	よにふれば	物思としも	なけれども	月にいくたび
同	年ふれば	こしの白山	老にけり	おほくの年の
古	みちのくの	忍ぶもぢずり	誰ゆゑに	みだれんと思
後	いとゞしく	過行かたの	こひしきに	うら山しくも

(《 》内は割り注。巻一 33葉裏面～34葉表面)

一時代がさらに細分されていて、中昔のばあいは、年次を西暦に換算しもするならば、次のようになります。

はじめ	781天応元年	桓武天皇即位，以後平城・嵯峨・淳和・仁明・文徳・清和
みなか	876貞観18年	陽成天皇即位，以後光孝・宇多
	897寛平 9年	醜翻天皇即位
	905延喜 5年	古今集
	930延長 8年	朱雀天皇即位
	946天慶 9年	村上天皇即位
	955天曆 9年	後撰集
末	967康保 4年	冷泉天皇即位，以後円融・花山
	986寛和 2年	花山天皇退位

醜翻・村上二天皇の名を特に挙げたのは、勅撰集を意識しているであろうと想像されます。

六運略図并辨は全体が成章の考えであるとして、かつて誰も疑うことをしませんでした。そこに、否、辨は御杖のものである、と竹岡（1946）が指摘し、その把握が一般に浸透しました。それから70年になろうかという今年、野口（2015）が、辨も成章のものであると、一編を費やして主張しました。私は、両論の是非を俄かには判断しかねますが、辨に違和感を強く持つところがあります。ほかならぬ、いまの引用箇所であり、中昔に拾遺集が挙げられたことについてです。単純な注意力不足の結果ではないことは、事例の歌にも拾遺集から採っていることで、明らかです。

御杖は、弟・成孚のために哆南辨乃異則^{たなべの}_{いそ}（1794寛政6年成）を著して、六運を踏まえつつ勅撰集の歌風を述べますが、三代集を重視しています。古今集・後撰集とともに拾遺集があります。その本体に、拾芥抄からの抜き書きであるとする、撰集次第というもの^①が付載され、二十一代集を挙げてそれぞれに簡略な説明を施しています。拾遺集に関するあたりを見ますと、次のようです。拾遺集がやはり中昔として扱われます。

古今 延喜五年乙丑四月十五日奉詔、御書所紀貫之為棟梁奉之、大内記友則、前甲斐
中昔 目凡河内躬恒、右衛門府生壬生忠岑等撰之、
後撰 天曆五年辛亥十月、於梨壺、以藏人少将伊尹為和歌所別当、
中昔 能宣 元輔 順 時文 望城等撰之、
拾遺 長徳頃大納言公任卿撰之、
中昔 或華山院法皇御自撰^②、
式百五年

①後拾遺 応徳三年丙寅九月十六日、中納言通俊卿撰進之事、次通俊卿所望撰^③、

②金葉 天治元年甲辰、依白河院綸言、俊頼朝臣撰之、

③詞華 天養元年甲子六月二日、依崇徳院勅、顕輔撰之

④ 中季 百七十二年 （三宅清『新編 富士谷御杖全集 第四巻』 pp. 442-443）

野口（2015）は、哆南辨乃異則の本体は御杖のものであるが、付載の撰集次第は成章のものであるとしています。いま、撰集次第の末尾の数行を引用します。ここでは「乙世」と記されている昨つ世をまとめた一文と、今の世の全文とになります。

十二代 乙世二百二十二年、

今世、後花園天皇永享十年^④ヨリ安永二年マデ三百三十六年、

六運図ニクハシクアリ、

（同上 p. 447）

ここに記された「安永二年」は、あゆひ抄の序文識語の年次であり、あゆひ抄の執筆と関係づけることができる。御杖は、幼少であり、そう記すことの意味づけができない。というのが、撰集次第を成章のものとする野口の論拠です。「永享十年」は、勅撰集最後の新統古今集の奏覧の年であり、六運にとって重要である、ということも指摘しています。それなりに納得できます。しかしながら、辻褄を合わせるには、新統古今集を今の世に動かして、昨つ世を勅撰集11代・195年とし、今の世を勅撰集1代に改めなければなりません。成章は拾芥抄を写して書き入れをしたかもしれないが、検算などを済ませて成稿を得た後、捨てたはずであった。拾われてしまって、検討もされずに、一書の最後に貼り込まれてしまった。成章には迷惑な措置であるなどと想像もします。

— 4.3 拾遺集について

拾芥抄は、鎌倉時代中期から室町時代前期にかけて次第次第に膨らんだと見られますが、拾遺集の成立時期は、その拾芥抄で既に確定せず、上に見たように二説が示されています。二説のうち的一方では、藤原公任拾遺抄の長徳年間995～999年となり、他方では、親撰の花山(天皇984年～) 法皇986年～1008年となります。いずれにしても、六運の中昔205年間にとっては、算入するのに無理があります。

成章は、かざし抄に見るようにかつては三代集を認めていたが、あゆひ抄に到る六運の構想において、拾遺集を古今集・後撰集から切り離し、中昔から外したであろう。しかし、御杖は、三代集を重んじ、中昔・中頃の年数との関係は検討しなかったらしい。といま知りました。六運の中昔についての解釈は、御杖のものが、後世にもなぜか通用します。

上つ世は記紀万葉等の時代、中昔は三代集・菅家万葉・六帖の時代、中頃は後拾遺・金葉・詞花・続詞華・堀川二度百首の時代、近昔は千載・新古今・新勅撰の時代、…
 … (福井 1926 p. 324)

次に第二期をそれ以後花山院までであるとするのは古今集から拾遺集即ち三代集をさしたのである。
 (久松 1932)

久松論文は一編を次のように締め括ります。その後、和歌全般の歴史を誰かが書いたか、承知していません。

特に六運に見られる和歌史観には最も創見が見られる点に、成章の見解の上で注目せられるのみでなく、現在に於て和歌史の区分と組織とを考へる上にも啓発せられる所が多いと思ふ。

さて、歌学という通念のうちには収まらないかと思いますが、西端(1994)が次のようなことを言いました。論文一編のほとんど冒頭に置かれた文章を、少し変更します。

一般的に、『古今集』『後撰集』『拾遺集』を一括して三代集と呼び、あたかも等質な性格をもった歌集の群れのように取り扱っているが、使用語句の性格を統計的に見ると、『拾遺集』には『古今集』『後撰集』と異質な面がある。勅撰八代集の歌風の転換点は『後拾遺集』にあると一般的に言われているが、語彙論の立場から八代集の和歌の使用語句の性格を精査してみると、『拾遺集』に転換点がある。

西端の統計というのは、語句を大まかな品詞と大まかな意味領域とで分け、異なり語数および延べ語数の比率を見比べた、というような簡単なものです。例えば、八代集における名詞・動詞の異なり・延べの百分率が、次のように算出されています。用語を入れ換えたり、境界というものを私に設けたり、少し変更しました。境界は、名詞の異なりのばあい、左側で境界値より小さく、右側で大きい、と読みます。境界値は適当に入れました。

		古今	後撰	境界	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今
異なり	名詞	55.1	53.7	<56.0<	58.2	56.9	59.4	57.4	59.3	58.6
	動詞	33.6	35.6	>33.3>	32.9	32.6	31.9	32.0	33.0	32.6
延べ	名詞	54.8	53.2	<55.1<	55.5	55.5	58.2	56.7	58.1	59.1
	動詞	34.8	35.6	>34.3>	33.5	33.8	32.5	33.2	32.5	31.8

簡単な集計で明らかになる違いは、わざわざ計算しなくとも感覚的に分かるものでありえます。成章は必ずや何かを鋭敏に見て取ったであろうと思う次第です。

国語学の徒には名文として忘れ難い一節をもって、あゆひ抄は始まります。

師曰、名をもて物をことわり。装をもて事をさだめ。挿頭、脚結をもてことばをたすく。

この四のくらみは、はじめひとつのことだまなり。あふよりてさだまれるもあり。とよりてかよひなれるもあり。
(第1冊(おほむね)1葉表面)

あゆひ抄おほむねは、言語論として評価されますが、しかし、成章の意図は、あゆひ抄本文をきちんと読むための導入であったでしょう。例えば、助詞「より」を説明するには、上接語句の品詞は問わず、活用語は連体形である、といったことを記さなければなりません。そのためには、予め、品詞を説明し、活用形を説明しなければなりません。その文章がおほむねであることとなります。六運も、本文で必要であるから述べるのであり、それを述べるためには、あるいは拾芥抄を読み、六運図略を描くこともあったでしょう。

六運があゆひ抄本文にどのように現れるかということを、佐藤(1953a・b・1954)が報告しています。概略は、佐藤(1954)の最後のまとめによれば、次のようです。

合計	上つ世	中昔	中頃	近昔	昨つ世	今の世
156	68	38	26	18	3	3

佐藤は、「上古「いにしへ」近き世「後の世」など、関係がありそうである用語も併せて数え上げていて、全部で217に及ぶ由です。

佐藤の批評で印象に残ったところを、二つ挙げます。あゆひ抄の引用は、佐藤のままにやらず、元に戻って、このお話のここまでの引用のしかたに合わせました。

卷一『詠^{ながめ}属^{のたぐひ}詠嘆^{の助詞}』【何^{前接}語句^や】第一「冠^{かう}枕^{ぶり}詞^のや」に

上世には、かぶりといふものをかならずかぶりたるも。ゆくりなくきこえさせじがため也。「や」とながむることかぶりにおほく。ことにかみ^初句^の五言^いことにおほし。上世のことをば今はいはず。中昔には。古今に√大はらやをしほの山√すが原やふしみのさと√おしてるやなにはのみつ√みまさかやくめのさら山などよみ。又√あふみのやかざみの山ともよめり。

(「√」は合点符、石井による置き換え。第2冊(第1巻)3葉裏面)

……、この「冠のや」の記述は、冒頭の関係もあってか、相当に長いものである。全体としては、六運の実例のサンプルとしての説明とも受け取れるものである。したがって、右のように、一部分を抜き出すことは、筆者の本意ではないが、……

(括弧類の置き換え、および^{割り}注^は石井。佐藤 1954 p. 10)

佐藤はここで「中昔」を取り上げ、したがって、あゆひ抄本文の引用の量も、その限りに抑えています。念のため、このあゆひ抄本文の直前を追加します。「冠のや」は、上接の語句「何」の条件を手短かに示してから、歌の本源に触れつつ、用法の説明をこれをもって始め、佐藤の引用の後になお「相当に長く」続きます。

おほよそ哥はながめをもとゝする故に。かぐらの早歌などにも。哥ごとにはじめに「や」とながめてうたへり。哥のはじめつかたはことにながめてうたひいだすべきに。おもひがけぬ詞、ゆくりなきことがらをよむべからず。されど中頃より後やうゝまことにながむることもすくなくなりもてきにたれば。近昔ころよりは。聞にくゝ耳だちたる五言もうちまじれり。さりながらその世の人も。はれの哥には猶心づかひせられけむとおぼゆ。
(第2冊(第1巻)3葉表面～裏面)

佐藤は、上の六運の時代名の整理で、ここの「その世」を、純然たる時代名である156のうちに入れず、言わばその他 61=217-156 のほうに数えています。

佐藤の批評から、印象に残ったいま一つ。

卷三『余利家の類助詞「より」』【何より】第一「出起点を表すより」に、

上つよには「より」少く「から」多し、「より」は「ゆ」ともよめり。中むかしよりは「より」おほく「から」少くなりて。中頃の末よりは。ひとへに哥には「より」とのみよむ事になれるを。今の里言さとごと。当代の口語には。又“から”とのみいひて“より”といふ事すくなきは。今のいにしへにかへるなり、（第4冊(第3卷)14葉表面）とあるのは、……、ひろく「より」につき、「上つよ」から「今」にいたる経過を説いている。各家とも、このような所説なら興味多いのであるが、全体から見たならば、このような説き方のまことに少いのは遺憾である。（佐藤 1953b p. 48）

なお、佐藤のように時代を検討すれば、4.3 までに記した中昔と拾遺集との関係の問題も片付きそうですが、うまくゆきません。あゆひ抄本文における挙例の方式が、

引歌は八代にとれるうちに。三代をむねとす。かたき例をば十三代にもとり。猶有がたきをば。諸集おもひうるまゝにとれり。

……引哥のかみに集の名をしるさざるは古今集也、

（第1冊(おほむね)3葉裏面～4葉表面）

として、読者も馴染んでいるであろう古今集・三代集・八代集の枠を保っていること、それに対応して、新しい時代に実例が少ないことに、関係するかと思えます。

—— 6 七体七百首をめぐって

成章の和歌の実作として、六運の各時代に沿って詠んだものがあります。2種類あって、一つは、正に時代ごとに詠むことをテーマとする、七体七百首です。いま一つは北辺成章家集に見られるものです。ともに、御杖の手を経て刊行されるに至りました。

—— 6.1 七体七百首の本文

七体七百首は、堀川院御時百首和歌（1105長治2年）の百題による題詠であり、一題ごとに、六運の各時代に対応する歌1首ずつを成章が作り、またそのいずれにも属さない「自創体」1首を添えて、合計7首とします。一書の冒頭を写します。校者・成元は御杖です。

七体七百首

富士谷成章 著
男 成元 校

立春

上古体	ものみなも	あらたまりけり	あたらしき	年のはじめに	あひしあひてば
中古体	春きぬと	けさしも人の	つけなくに	空にしりても	たつ霞かな
中季体	けふこそは	たつときゝしか	あづまより	都にいかで	春のきつらん
近昔体	よも山は	まだふる年の	雪ながら	みやこの空に	はるはきにけり
弟世体	浅みどり	春たつかたと	いふばかり	山もかすみて	いづる日のかげ
当時体	くる春は	のどけさも猶	たぐひあらじ	国はひのもと	時は君が世
自創体	名のみたつ	春とやみまし	けさはまづ	空のけしきの	かすまざりせば

子日

上	初春の	はつねの	けふは	かくしこそ	いやとしのはに	野べにあそばめ
中	子日する	野べに	小まつの	おほかれば	ちよのかぎりも	あらじとぞ思
季	中いつしかと	野べに	いづれば	初子日	まつにひかるゝ	こゝちこそすれ
近	おほはらや	をしほの山に	ねのびして	松を千とせの	ためしにぞひく	
弟	いかにして	野べの	小まつを	鶯の	はつねながらに	やどにうつさむ
当	はつ春の	はつねの	けふは	もろ人も	よはひをのべに	小まつをぞひく
自	あづさ弓	はるのはつねの	小まつ原	よろづよかねて	ひきやうゑまし	

（影印，三宅清『新編 富士谷御杖全集 第五卷』pp. 525-526.

翻刻，竹岡正夫『富士谷成章全集 上』pp. 1195-1196)

見られるように、御杖の手を経ています。跋文も次のようにあります。

このさうしは、神よゝり今のよまでうつろひきにたるすがたを六きはとし、みづからおもへるすがたをくはへて、そのすがたゝゝによみこゝろみたるもゝ歌なり、もとより、花鳥の色にもねにも、おのづからあはれと思ひしらるゝ折ふしには、われだにしらず、うためきたる歌もうちうたはるゝこともあれど、これは題もさだまり、すがたをもまぼり、うちみじろくべうもあらず、ましてゝ哥をひとすがたなればいづれもゝゝいかなどはよろしからむ、しかはあれど、みづからなゝつのすがたをさだめ、やがてそのことのわざにかなへるをみるにつけて、かへりみるらん人すくなきよのさまさへ身をつまれてうちなげかるゝも、なほちゝのみのおもひなしにてやあるらん、北辺のいまのあるじ成元、父成章がなゝもゝちなゝすがたの歌の後にしるす、

寛政九年九月

(同上, 影印 pp. 607-608, 翻刻 p. 1252)

六運と比べて、時代が六つであることは同じい。しかし、時代名は、「中季」が「なかごろ」と読むものであるならば、「中季」「近昔」「昨つ世」で六運に合致して和語であり、「中季」が「ちゅうき」であるならば、「上古」「中古」でかざし抄と同じく、「中季」も含めて漢語であって、全体では分かれます。概念・用語が形成される中途段階である感じます。また、「体」という用語も、時代名に添えて適切であるか、成章の用語の体系のなかでは不審を残します。三宅(1981)によれば、御杖の筆ではないが編集原稿と目されるものも遺り、板行本と小異があるといえます。疑問がありはしますが、六運の具体的な理解のためには、これ以上のものが見出だし難い状態です。

福井(1930)の批評を写しておきます。六運についての評価を含み、その点では、3.3に山田の評言を引用した際に、並べて記すべきでした。

今日から見れば撰集の上からばかりで時代の区劃もいかゞである。異なった作風を創めた大きな歌人によっても分けねばならぬが、世間がまだ時代の変遷をはっきりと意識しない時に斯くも精密に区分したことに對し、吾人は大に尊敬を表しなければならぬ。この六運に自創体を加えたことはその抱負の如何を知ることが出来る。この七体を月の歌に見る。……

この一例では各時代の姿をはっきりつかむことは難いが、万葉と三代集また金葉詞華と千載新古今とのかはった風などは大凡はたどられる。(pp. 236~237)

なお、昨つ世の名称について、一言します。あゆひ抄の六運の箇条の直前の箇条は、五十音図を呈示し、次のように説明しています。

世にたてぬき^{経・緯。}_{五十音図の行・段}のことわりをしらぬ人。あて^ア行のおもじ^{仮名}お^おをわた^ワて^ワにおき。わたてのをもじをあててにおくは、あやまれり。(第1冊(おほむね)13葉表面)

五十音図で長く「お」「を」が逆に配置されていたのを正したとして、本居宣長の字音仮字用格^{じおん}_{かなづかひ}(1776安永5年板行)とどちらが先であるかと、国語学史で取り上げられる箇所です。これを言った直後に、六運において「をとつよ」としています。本文でも「をとつよ」3箇所です。この仮名遣いによって、このお話の原稿では、「をとつひ(一昨日)」の漢字を応用して「昨つ世」としてきています。漢字としては「遠つ世」のほうが語源に沿うかもしれませんが、「近昔」「遠世」「今世」という漢字の並びは、感覚を混乱させます。さて、この七体七百首では「弟世」であり、4.2で見た哆南辨乃異則の撰集次第の「乙世」にしても、仮名で記すならば「おとつよ」となります。御杖にも何か思うところがあるのでしょうか、このお話では以下も「昨」を採ります。

和歌の六運の変遷は、幾つかの側面から観察されるべきものであると思います。竹岡(1971)は、次のように述べています。

このような見事な時代区分が出来た根底には……優れた深い言語観に由来しているが、その考察の方法は、まず古今和歌集における「旨^{むね}趣^{おもぶき}」とその表現に直接関連のある各種の語の意味・用法を実証的に研究帰納し、それを「本」として、以後各時代の用例について実証的に観察し、「本」の意味・用法と比較して行くのである。刊本『あゆひ抄』詠属「何や」の説明などがその最も優れた例である。「六運」も単に歌語の意味・用法の変遷からのみ区分したのではなく、また区分しようとしても容易でないが、その根本ともいべき「旨趣」の変遷という観点を中心になされたものと考えられるのである。(p. 390)

旨趣は、『かざし抄』『あゆひ抄』における成章の研究も……この「旨趣」という視点からの研究であったとあってよい(同書p. 587)というようなものであり、立ち入りません。要は、あゆひ抄おほむね上に「凡、歌の詞」(上掲2.1)と切り出している、六運は詞に止まる概念ではないということです。

しかし、具体的な外見がなければ、つまり言語について規定されなければ、適当に言い抜けをされて、分からないではないか。対象を最初から総合的に見る必要はない。外形の言語が一面に過ぎないということがあったとしても、その言語を追ってみよう。というのが、私が探ろうするたちばです。七体七百首の言語を、六運が背後にあることを前提として、分析するということです。七つの言語を歴史的に関係づけよ、という問題は、正に比較文法 comparative grammar のものです。歴史的に関係づけると言っても、六つについては順序も分かっていますから、それぞれの体系なり、変遷すなわち前後間の異同なりを記述することが、主なしごとになります。参考としてあゆひ抄の記述がある。他の日本語の記述一般を参照することも可とする。なお、文字・音韻は言語七つを通して同じである。という条件も、与えられています。一題一題について、七体の間の異同を明らかにしなければならず、ただし、一方の一題では、いずれも異なりを見せているかもしれない一方で、他方の一題では、いずれも異なりに関係していないかもしれない、といったことも、一応は考えておいてよいかと思えます。

しかし、と逆接を重ねて、お話を閉じなければなりません。どこから手を着けてよいかが、分かりかねているからです。一首一首の注釈から始めるという王道に踏み入るのが、最善であると、遅蒔きながら思えるようになってきました。七体の言語について、いま分かっていることには、さしたるものはありません。どの時代を通して、漢語は「菊」にとどまり、字余りの句では中にア列の仮名がある、といったことです。題はほとんどそのままの時代でもキーワードになりますが、その偏りに、何かを示唆するものがあるという見かたをしてよいように思います。例えば、

・ 立春で、「春」および「来「立つ」はキーワードであり、それが見えないことで上つ世を特徴づけることもできるかと思える。他に、次の題でも、上つ世のみがキーワードを見せない。

苗代 あし引の 山ざくらさく 尾上田に ゆだねまくべき 時にはなりぬ
五月雨 日ならべて 雨ふるみれば ほとゝぎす きなくさ月と しるくありけり

初冬 木葉ちり 時雨いたくふり あし引の あらしのさむき 時にはなりぬ

- ・ その立春で、中昔・近昔・自創体に、「空」が見える。中昔・自創体には、さらに「霞」「霞む」が見える。時代を超える特徴として、覚えておいてよいかもしれない。
- ・ 子の日で、中昔・中頃・近昔で「子の日」のまとまりがあり、それを挟む前後で「はつね」である。つまり、勅撰集の前半九代がまとまる。
- ・ 同じく子の日で、「野辺」は中昔・自創体にも見えない。
- ・ また、題を含まないことに繋がると思えるものとして、「(小)松」が上つ世に見えないことを覚えておいてよいかもしれない。

国語史にかかわることとして、例えば、早蕨

上 いもが為 かたみぬぎかけ 手もすまに つめりしみねの さわらびぞこれ
とある「手もすまに」は、いかにも万葉集らしい表現です。しかし、

近 風わたる 池のこほりも うちとけて 崖ねになびく 青柳の糸
とある「崖根」は、近昔でなく、後のあるいは今の世に漸く現れる語句ではないかと疑われます。前の時代の表現を後の時代が利用することは、当然にありうることでしょうが、もし後の時代の表現を前の時代でも使用してよいとすると、一語句一語句の時代性を問うことは、ひとまず意味をなさなくなります。体言・用言では時代性を無視するが、助辞では時代性を問題とする、というたちばによるときに、問題が復活します。文語を書き記すという営みは、恐らくそのようなたちばを採ってきたでしょう。

厄介な問題ですが、課題としてお話したかったことをまとめます。多様で豊穡な事象を並べる歴史もあってよいが、成章の六運のように、一本の筋として歴史を捉えるたちばもあってよいであろう。ということになります。それによって、見えてくるもの、提起できる問題もあるでしょう。文学史とか文化史・社会史とかに、あるいは言語史とかに、一般化できるかどうかは分かりませんが、少なくとも和歌については成章が問題を差し出しています。成章の六運が肯定されるか否定されるかは、二次的な問題です。

—— 6.3 むきはのうた

北辺成章家集は、次のように始まります。六運の時代に6首ずつ挙げられています。ここではそれぞれ第1首・第6首の2首ずつを写します。

むきはのうた

みづからよみおけるうたどものなかに、いたくもてはなれぬにやとおもはしきかぎり
を、すこしづゝえり出せるなり、かたはらいたきうちとけごとなれば、人にみすべくも
あらずや、

かみつ世

はしきやし いもがみためと 野べに出て わかなつむ日を 雪なふりそね
うつせみし 常にあらめや 春花の にこえさかりて ちらくおもへば

なかむかし

白雲は なほふるとしと みえながら はるはかすみの たつにぞ有ける
かぎりなき よをこめもたる 竹なれば うへこそ色も かはらざりけれ

なかごろ

みこしちの 雪げはゝるを しるらむや いまぞかりがね なきかへるなる

かみのます みむろのさかき とりもちて 君をぞいのる ときはかきはに
近むかし

あだなれど たれかはとおもふ 花の色を うらみはてゝや かへるかりがね
かひなしや またあふまでは きえどゝす えもしら玉の そでのなみだは
おとつ世

花のかを ゆるしそめしも くやしきは ちりゆくころの 梅のしたかぜ
おのづから 人やとふとも やまぎとに こゝろのすまぬ ほどぞまたれし
今の世

うちゝると みしあわ雪も はてはたゞ 木の芽のけぶり 若草の露
夕まぐれ おもき真柴も やすめあへず そばづたひして いそぐ山人 (pp. 1-4)

七体七百首と重なるのは、上つ世6首および中昔2首です。

佐佐木（1923）は、「成章の六運図略に述べた和歌変遷観は、歌学の方からは特に注意すべきものとされる。」（p. 193）と一言し、「成章家集中の六運の歌は、彼の歌体の変遷観を知る便ともなるから、雑の歌をかかげておく。」（p. 195）として、いまここにも写した各時代の第6首を掲げています。しかし、その1首ずつによっても、各時代の全部によっても、時代の違いを確と見定めることは難しいという感想をもちます。七体七百首などによって得るものがあつたときに、点検にここに戻るのがよいようです。

参考文献 2 本文で言及しなかったものを含む

- 足立 卷一 (1974) やちまた 上・下。河出書房新社。2015年, 中公文庫。
- 佐佐木信綱 (1923) 近世和歌史。博文館。
- (1972) 日本歌学大系 第八卷。風間書房。
pp. 9-41 哆南辨乃異則
- 佐藤 茂 (1953a) 「あゆひ抄」における六運の用語例について。
福井大学, 国語国文学 1 pp. 1-10。
- (1953b) 「あゆひ抄」における六運の用語例 (二)。
福井大学, 国語国文学 2 pp. 40-49。
- (1954) 「あゆひ抄」における六運の用語例 (三)。
福井大学, 国語国文学 3 pp. 9-19。
- 中村 幸彦 (1959) 日本古典文学大系 56 上田秋成集。岩波書店。
- 西端 幸雄 (1994) 語彙史の立場から見た『拾遺和歌集』——使用語句の性格を
統計的に見る。国語語彙史の研究 14 pp. 318-303。
- 野口 隆 (2015) 富士谷成章の六運説と御杖。京都大学, 国語国文 84. 4 pp. 281-300。
- 橋本不美男・滝沢 貞夫
(1976) 校本 堀河院御時百首和歌とその研究 本文・研究篇。笠間書院。
- 久松 潜一 (1932) 富士谷成章と和歌史観。東京大学, 国語と国文学 9. 10 pp. 218-236。
- 福井 久蔵 (1926) 大日本歌学史。不二書房。
- (1930) 近世和歌史。成美堂書店。
- (1944) 国語学大系 第十五卷 手爾波二。1975年, 第八巻として, 国書刊行会。
pp. 53-216 あゆひ抄
- 正宗 敦夫・大島仲太郎・宮内猪之熊
(1910) 富士谷御杖編 北辺成章家集。歌文珍書保存会。
- 三宅 清 (1986) 新編 富士谷御杖全集 第四巻。思文閣出版。
pp. 423-447 哆南辨乃異則
- (1981) 新編 富士谷御杖全集 第五巻。思文閣出版。
pp. 33-468 うたふくろ pp. 523-610 北辺七体七百首
- 山田 孝雄 (1935) 国語学史要。岩波全書。
- (1943) 国語学史。宝文館出版。
- 矢守 一彦・大塚 隆
(1976) 日本の古地図 4 京都。講談社。
p. 18 御築地辺絵図 安永初期 (1772年頃)

筑後州山門郡本郷馬場記 (改行・闕字は原文による。読点・濁点・字体区別は原文にない。)

つはものゝ道、かたゞゝにわかれ、ものゝふのわざ、さまゞゝにおほかる中に、
弓と馬とをしもむねとせる事は、遠きにおよび、あたをほろぼさむには、
弓にしける物なく、さがしきをわたり、かたきをくだかむには、馬にしけるもの
なければなり、しかはあれど、千尋いわす矢の力は、かのひとりふたりのあしがるを
たひらげ、やつをふみこゆるひづめのいきほひは、真もゝちの軍をもやぶり
つべけれど、猶馬はするわざをさきとしてこそ、もろゝゝの兵のとさも、
まさるべかめれ、今

守の君、あきらかに政をしたゝめさせ給ひ、ひろく民をめぐませたまへば、
みけのさをはしたじろく事なく、千年の川のすみよきを楽める事、
道の君の古にもこえたれど、猶しづはたのをさまれるにめなれて、青柳の
糸のみだれをわすれじと おぼしめして、

御みづからをはじめたてまつりて、さぶらふ人々までも、兵の道を明くれに
ならひきはめ、其しなのよしあしきけぢめを定させ給中に、馬はする道をなむ、
とりわきておもくせさせ給、こゝに矢島行隆、清水隆官、今村備辰等、
その道にたへたるにたばからせ給て、ことし、みさかひのうち本郷といふ
所に、うまばをつくらしめ給、四箇所通久、その事をうけ給はり、板井種長、
これがすけとして、只ふた月ばかりのほどにめでたくつくりはてつ、かくて
おぼしゝもしるく、いきをならべ、たづなをかはず人、たえずあふりの音、蹄の
ひゞきも、所えてきこゆるを、わたらせ給つゝ 御覧ずるまゝに、此わざの
光そふのみならず、大かたものゝふの道いやさかえて、

遠つみおやの御いさをしもあらはれ、ひろき みさかひのうち、たひらかに
をさまりなむ事を、み心ゆきておぼしめし、よろこばせ給事かぎりなし、
かくつくりおかせ給はじめをしるすべきよし、成章に おほせごとあれば、
はふ葛のつたなきをもちへり見ず、霜にくちぬることのはをえらびて
たてまつる事は、あやしき身ひとつに、あまねき 御めぐみをかぶらむよろこびに
たへぬのみにあらず、すべて 御さかひのうちのうちの人ごとにかたりつぎつゝ、
かしこき 御おきてをあふぎて、ふかき 御いつくしみをしれとなり、
宝暦八年戊寅九月

藩臣平安富士谷成章謹撰并書

島原の歌碑・句碑

いずれも島原伝統保存会の解説が記され、成章・蕪村のものほかに、島原大門に

島原のでぐちのやなぎをみて 大田垣蓮月

なつかしき やなぎのまゆの 春風に なびくほかげや さとの夕ぐれ

歌舞練場跡に、吉井勇

宝暦の むかしの夢は 見は見つれ 夜半の投節 聴くよしもなし

松原住吉神社の旧境内に、服部嵐雪

島原の 外も染るや 藍島

成章、字ハ仲達、初メ号シ₂層城ト₁、後ニ又改メテ用₂もチテ₂其ノ宅ノ地名ヲ₁号ス₂
北辺_{きたのべ}ト₁。実ニ某ガ_ガ弟也。

三歳ニシテ能ク_{クシ}書₁ヲ、七歳ニシテ能ク_{クス}詩₁ヲ。九歳ノ夏ニ、会ヒ₂韓人ノ
来聘_{スルニ}スル₁、詣_{リテ}館_ニ筆談_ス。機警・超抜ニシテ、諸韓吐ク_ク舌_ヲス₁。

及ビテ₂長ズルニ₁学ハ_ハ渉ル₂經史_ニス₁。見_テ某ノ攻ムルニ₂經ヲ₁有_ル所₄發_{スル}ス₃、
而喜_{ビテ}以_レ為_ヘラク、是_レ為_ス千古之道ノ於₂今ニ₁顯_ルルト₃矣。然_ルニ、彼ハ_ハ雖_モス₂

聖作_{ナリト}ス₁、異国之故タル耳。苟モ非_{ザレバ}通_{ズルニ}吾ガ₂民ノ故_ニス₁、惡_ク能_ク
伝_ニ絶_{シテ}之_ヲス₁、以_テ化_{セム}我ガ₂俗ヲ₁哉ト。因_{リテ}、兼_{ネテ}為_{ナセシ}吾ガ₂話ヲ₁、

自_リ国史₁已下、諸ノ令式等ノ書、及_ビ諸ノ吾ガ₂古ノ名人ノ家乗・遺集、靡_ク不_ルス₂
遍_ク探_ラス₁、探_{レバ}靡_シ弗_{トイフ}コト₂究_メス₁。

又苦_シミテ攻_{ムル}コト₂和歌_ヲス₁、自_リ幼_キ及_ビ死_ニス₁、所_ハ為_ス幾十万首_{ニシテ}
諸体該_{みな}備_{ハリ}、運_{ラシテ}思_ヒ無_シ窮_{マル}コト₁。

受_{クル}業_ヲ者_ハ遍_ク於₂四方_ニス₁、嘗_テ為_{シテ}積_シ話_ヲス₁、而_以チテ口_ニ授_ス其_ノ
徒_ニス₁。有_{リテ}挿頭・脚結抄₁、已_ニ行_{ハル}世_ニス₁。其ノ欲_{シテ}撰_セムト₁

未_ダル₃脱_セ稿_ヲ者_ハ、無慮数百種_{ナリ}。

平生ノ為_リ人_トス₁、風流・温籍_{うんしゃ}、加_{フルニ}以_{チテ}ス₂其ノ天資ノ聡悟_{ナルヲ}ス₁。

学_ブヤ₂諸ノ技芸_ヲス₁、一タビ聞_{ケバ}即_チ通_ズ。而_{シテ}其ノ未_ダル_ハ成_ラス₁、則_チ不₂
肯_{アヘテ}出_ダサ₁、出_ダセバ_必ズ超_ユ於₂人_ニス₁。諸、学_{ビテ}天文・曆算及_ビ雑技・

吹彈_ヲス₁、皆莫_シ不_ル然_ラス₁。

人ノ始_{メテ}与_{とも}ニ会_{スル}者_ハ、見_{テハ}其ノ形軀ノ眇少_{ナルヲ}ス₁、輕_ニ侮_シ之_ヲス₁、
既_{ニシテ}見_{テハ}其ノ敏_{ナルヲ}ス₁、必_ズ大_イニ傾駭_{シテ}、既_已す_ニ以_{チテ}為_ス天人_トス₁也。

間時_{ニハ}出_{シテ}新意_ヲ創_リ器_ヲス₁、其ノ器_ハ必_ズ為_ニ人ノ₁伝播_{セラル}。

余、嘗_テ与₂清君錦・諸人₁集_ヒ於₂成章ノ家_ニス₁、出_{シテ}題_ヲ賦_{シタリ}五律_ヲス₁。

自_リ午₁迄_{いたリテ}子_ニス₁、余先_ヅ就_{ナリ}、君錦次_ニ就_ル。成章独_リ後_ルモ、及_{ビテ}ス₃
出_スニ_之ヲ₁、各皆有_{リテ}倭歌₁以_{チテ}副_{フル}也。乃_チ皆大_イニ服_ス。

年十九_ノトキ、会々_{たまたま}通家富士谷尹寿死_{シテ}無_シ子₁。其ノ母乞_{ヒテ}成章_ヲス₁
以_{チテ}為_シ嗣_トス₁、与₂其ノ女₁配_ス。生_ミ男_{成元}ヲ₁、次_ニ女_二男_{アリ}、尚幼_シ。

側室ノ所₂生_ムス₁、三女_{アリテ}次_ハ男、尚幼_シ。

家ノ大人已_ニ老_テ病_ミ、以_{チテ}成章ノ家多_{キヲ}所₄悞_{マシムル}耳目_ヲス₁、寄_ニ養_ス
其ノ家_ニス₁。成章侍養_{シテ}極_メ孝_ヲス₁、凡_ソ其ノ所₃欲_{スル}飲食_ヲス₁、日_ニ必_ズ適_フ
其ノ意_ニス₁。

其ノ家、世々、為ニ筑後柳川藩ノ幹_一辨_シ買局ノ事務ヲ_一、以チテ衣食ス焉。柳川侯、毎ニ_三入ル_二京ニ_一、輒チ過リ_二其ノ家ニ_一、而シテ其所_二坐スル_一有リ_二常ノ位_一。成章、寝ヌルニ未ダ_ノズ_七嘗テ以チテ_二趾ヲ_一向ケ_六其ノ位。及ビ家ノ大人ノ所_四居ル_三之室ニ_五。

其ノ敬慎ハ多シ_二此ノ類ヒ_一。

成章嘗テ病ミテ、不_四可カラ_三剃ル_二其ノ髭ヲ_一、心ニ慮リ_三其ノ憂フルコトヲ_二己ガ病ヲ_一、毎ニ_三至ル_二其ノ前ニ_一、必ズ掩フ_二其ノ髭ヲ_一。

已ニ喪ヒテ_二家ノ大人ヲ_一、哀痛過_二節ニ_一。又力疾送ル_二葬ヲ_一。因リテ遂ニ致ス_四不_ルヲ_三可カラ_二救フ_一。年四十有二、浮屠ノ諡ヲ_二曰ヒ_一紹琬ト_一、葬ル_二之ヲ_一洛北蓮台寺先塋之側ニ_一。銘ニ曰フ、

材学超_二倫ヲ_一、可_シ為_ル邦ノ珍_一。

天不_三仮サ_二年ヲ_一、俄ニ奪フ_二斯ノ人ヲ_一。噫。

安永九年庚子春二月、皆川愿撰、皆川成均謹書、孝子成寿謹建之。

中田祝夫・竹岡正夫『あゆひ抄新注』pp. 25-26 による

(手控)

藤原惺窩 — 林 羅山
那波活所 — 伊藤坦庵 — 伊藤龍洲 — 伊藤錦里 — 皆川淇園
松永尺五
堀 杏庵
清田君錦

成章名義の著作

成章を著作者として板行されたものに、ほかに

和歌梯

1794寛政6年蘭園主人序・編、成孚凡例識語

がある。この蘭園主人は一般に成章と理解されているが、御杖のほうが年代に合い、成孚は御杖の弟であるから、御杖あるいは成孚の著ではないかと疑われる。一書の内容は、題詠を行う際に適当である語句を、和歌の一句ごとに挙げるものである。

略図の体裁のイメージ 原文の混乱を改める。アラビア数字は西暦年次，適宜入れる。

第二なかむかし

自五十代桓武天皇延暦元年到六十五代花山院寛和二年凡二百五年

桓武 延暦	783			786	
			791		
		796			
	801				
平城 大同				嵯峨 弘仁	811
				816	
			821		
淳和 天長		826			
	831			仁明 承和	
	836				841
				846	
嘉祥			文徳 仁寿		
斉衡		856	天安	858	清和 貞観

(下略)

第六いまの世

自百四代後土御門院御宇之始至当時凡三百年餘

(上略)

1732				桜町 元文	
			寛保	1742	(余分)
1743	延享		1746		桃園 寛延
		宝暦			
	1756				
1761		今上		明和	

(余分が1年分ある。最終行は罫線を欠くが，天皇・元号を相応に配した。)

奥書

(右むきはの……ノ後半ガアッテ，ソノ後ニ)

安永六とせと聞る 初冬写し畢

(以上デ一面)

平松宗致なる人の、とふとき人に聞にしことの葉をかき集けるが、以万世などいへることの葉は障なんあれば、弘せんことを憚ぬなどいえる、あながちにこひ求て書写し侍るものならし、

(以上デ一面)

文化三歳次丙寅仲春 江沢氏惟馨

(以上デ一面)

皆川文蔵が、度々あふごとに、「どうじや、おやぢ」となぶらるゝ事じや。同年、髪がく
らうて、歯が落いで、杖いらずの目自慢じや有た。いつぞやの出会い、「どうやら骨が細
うなつた。さきへお死にやろ。念仏申てやろ」といふたが、はたしてそのとをりじやあつ
た。講堂もしつくい、溝の曲水も犬のくそのたまる所になつたよし。あほうにはちがいは
ない。

又弟の不二谷千右衛門は、兄よりかしこいで、学文も何にもよかつたとぞ。俳かいの友で、
むかしは度々出会した。互に又国詩国文の好にかわつた。大坂くだりにはちよこゝ、よら
れた。女ずきで、腎虚火動で、ほへゝゝしなれたと、かいほうした書生がはなし也。そん
なら是もあほうであつた。

中村幸彦校注『日本古典文学大系56 上田秋成集』pp. 266-267 による

富士谷家は、柳川藩の京留守居として、藩入用のものを大坂で調達することも担当し、成
章もよく出かけたようである。それが「大坂くだり」である。

本居宣長 玉勝間

藤谷^ノ成章といひし人の事

ちかきころ京に。藤谷^ノ専右衛門成章といふ人有ける、それがつくれる。かざし抄、あゆ
ひ抄、六運図略などいふふみどもを見て。おどろかれぬ。それよりさきにも。さる人有と
は。ほの聞たりしかど。例の今やうの。かいなでの哥よみならんと。みゝもたゝざりしを。
此ふみどもを見てぞ。しれる人に。あるやうとひしかば。此ちかきほど。みまかりぬと聞
て。又おどろかれぬ。そもゝゝ此ごろのうたよみどもは。すこし人にもまさりて。もちひ
らるゝばかりにもなれば。おのれひとり此道えたるかほして。心やりたかぶるめれど。
よめる哥かける文いへる説などをきけば。ひがことのみ多く。みないといまだしきもの
にて。これはとおぼゆるは。いとかたく。ましてぬけ出たるは。たえてなきよに、この藤
谷は。さるたぐひにあらず。又ふるきすぢをとらへてみだりに高きことのみいふともが
らはた。よにおほかるを。さるたぐひにもあらず。万葉よりあなたのごとは。いかゞあら
む。しらず。六運の辨にいへるおもむきを見るに。古今集よりこなたさまの哥のやうを。
よく見しれることは。大かたちかき世に。ならぶ人あらじとぞおぼゆる。北辺集といひ
て哥の集もあるを。見たるに。よめるうたは。さしもすぐれたりとはなけれど。いまのよ
の哥よみのやうなる。ひがことは。をさゝゝ見えずなん有ける。さもあたらしき人の。は
やくもうせぬることよ。その子の専右衛門といふも。まだとしわかけれど。心いれて。わ
ざと此道ものすときは。ちゝの気はひもそはりたらむと。たのもしくおぼゆかし。そ
れが物したる書どもゝ。これかれと。見えしらがふめり。

(巻八、21葉表面～22葉表面)

稿本あゆひ抄

かみつよ 中むかし 中頃 近むかし をとつ世 今の世

(勉誠社文庫 p. 174)

凡、哥の詞。中むかしはかみつよをうしなひ。中ごろは中むかしにたがひゆき。近むかしよりは、ことに心得たがへることのみぞ、おほき。かく、時にしたがひてやうゝ、よみなりたるけぢめをば。其条々にすこしづゝさだめとけり。いにしへ今のたがひめにはあらで。そのよみ人によりてひがよみしたるばかりのことをば、とりたてゝいはず。此抄、ひとへにもとをあかさむの心にて。末をおさふるにいとまあらねばなり。

(勉誠社文庫 p. 179)

六運辨から 天理図書館現蔵一本

第二なかむかし

あがりての世はるかなるむかしは、なにごとにつけてもてる日ともねがはしく、たかき山どもあふがまほしき中に、此きはぞ今もみゝとほからず、よゝの哥よみたちも、これをもとゝして口をもひらかれければ、かへすゝもめをつくべきは此とき也、そのうちにも、水ののをの御時までをはじめつかたといふべし、この時まではふかくもてあそばせ給けむよしもみえず、貫之が花すゝきほにいだすべくももとかきたるも、このあひだのことをおもへるなるべし、その後より醍醐村上の御時までをみなかたす、上より下までよみ人おほく、ことがらおのづからうるはしくとゝのほりて、ほのかに今ののりをそなへ、あらはにいにしへのふりぬることをあらためられたり、それより末このむ人よむひといやましにおほくなりゆき、ことのはさらにしげかりけれど、みなかよりいはずすこしつくりたるすがたもみえそめて、おのづからなかごろのすがたをばみたれば、このほどをすへつかたといふべし、集には古今、後撰、拾遺、菅家万葉、六帖等つねに人のもてなやみぐさなり、又いせ物がたり、やまものがたりなどもとむるにことたりぬべし、
さくら花 咲にけらしも 足引の 山のかひより みゆるしら雲
時鳥 はつかなるねを きゝそめて あらぬもそれと おぼめかれつゝ
よにふれば 物おもふとしも なけれども 月に幾度 ながめしつらん
年ふれば こしのしら山 おひにけり おほくのとしの 雪積りつゝ
みちのくの しのぶもぢずり たれゆえに 乱そめにし 我ならなくに
いとゞしく 過ゆく方の こひしきに うら山しくも 帰るなみ哉

歌袋

第二なかむかし 中むかし十六代、今の世の 哥のおやといふべし

あがりての世はるかなる昔は、何事につけてもてる日ともねがはしく、たかき山どもあふがまほしき中に、此きはぞ今も耳とほからず、よゝの哥よみたちも、この時を本として口をもひらかれければ、かへすゞも目をつくべきは此きはなり、そが中にも、水の清和の御時までをはじめつかたといふべし、此時までは詞の道ふかくもてあそばせ給けんとみえず、つらゆきが花すゝきほにいだすべくもとかきたるも、此あひだの事をや思ひけん、そのゝちより醍醐村上の御時までをみなかとす、上より下までよみ人もおほく、ことがらおのづからうるはしくとゝのほりて、ほのかに今ののりをそなへ、あらはにいにしへのふりたるをあらためられたり、それより末このむ人よむ人いやましにおほくなりゆき、ことのはさらにしげかりけれど、みなかよりいはゞすこしつくりたるすがたも見えそめて、おのづからなるころの姿をはらみたれば、このほどを末つかたといふべし、集には古今、後撰、拾遺、菅家万葉、六帖等つねに人のもてなやみぐさなり、又いせものがたり、大和物語などもとむるにことたりぬべし、

古 さくら花 咲にけらしも あし引の 山のかひより みゆるしら雲 貫之
後 ほとゝぎす はつかなるねを 聞そめて あらぬもそれと おぼめかれつゝ 伊勢
拾 よにふれば 物思としも なけれども 月にいくたび ながめしつらん 具平親王
同 年ふれば こしの白山 老にけり おほくの年の 行つもりつゝ 忠見
古 みちのくの 忍ぶもちずり 誰ゆゑに みだれんと思 我ならなくに 河原左大臣
後 いとどしく 過行かたの こひしきに うら山しくも かへるなみかな 業平

(巻一 33葉裏面～34葉表面)

六運辨における中頃 二分されている

もと	986寛和 2年	一条天皇即位
	996長徳 2年	拾遺抄
	1006寛弘 3年	拾遺集
	1011寛弘 8年	三条天皇即位，以後，後一条・後朱雀・後冷泉・後三条
末	1073延久 4年	白河天皇
	1086応徳 3年	後拾遺和歌集
	1087応徳 3年	堀河天皇即位，以後，鳥羽
	1123保安 4年	崇徳天皇
	1126大治元年	金葉和歌集
	1142永治元年	近衛天皇
	1151仁平元年	詞花和歌集
	1155久寿 2年	後白河天皇
	1158保元 3年	後白河天皇退位

北辺成章家集 歌集

家集前半は歌集であり、

むきはのうた36首、長歌1首(97句)、

題詠で春45首・夏28首・秋47首・冬18首・恋62首・雑29首、

さらに成章判の三十五番歌合(成章は7番で詠んで持2首・負5首)を収める。

長歌

そらにみつ やまとのくにの ことだまは あやにかしこく あめつちの
なかにすぐれて よものうみ よろづのくにゝ たぐひなく
さだまれりとぞ きこゆなる しかはあれども 梓 弓
いまの世にして もとむれば くもまの月 の かげとほく
雪 のした草 そことだに たづねがたくぞ なりにたる
かたらむことは かみよゝり しろしめしてや 進 雄の
かみのみことは 八雲 たつ いづもの道 を ふみそめて
此 あとにだに したがはゞ やつをゝすけて かきならず
そのことわりも もとむべく くめぢにわたす かけはしの
こゝろはえてむ ものどこそ かねてはさだめ たまひけめ
みそことあまり ひとことに もゝちのこゝろ そなはりて
おもふことをし のべつれば をとめをとこも みどり子も
ほどにつけつゝ しりやすく よみがたからぬ わざぞかし
まして弓 とる ますら男は みなおりたちて ことのはの
しげきはやしに さまよひて かげをめでつつ 月 をおもひ
香をたづねては 花 をしる 人 もかずなく なりにたり
これをおもへば おのがじゝ ならむすがたは 足 引 の
やまの木こりが こしにさす よきはなしとて なには江の
あしきもなにか あしからむ さりとてたゞに うちすてゝ
くだりゆく世に まかせなば もとのまことは かくろひて
まやのひさしの 杉 板 の いたづらごとになりぬべし
おのが浦 ヲ こぐふねの まほもかたほも 大 伴 の
みつのはまべに みなとிரい うまだくぬしも かぢびとも
ゆきとしゆかば おほみやの みかどのまへに いたらざらめや